

# 地震観測を決定付ける電磁地震計!!

熊本地震で(電磁前兆)を  
1週間前に観測記録した!

電磁観測網(3種)の敷設で  
地震予報(データ発表)可能!

# その訳は？

(いつ) 前震や本震の前兆は1週間前に出る！

(どこ) 場所＝観測網の敷設が必要です！

(震度) 震度＝6～7は≒100%で地震予測可！

(特1) 前震＝4連続の地震と判別できた。

(特2) 本震＝5 同上 と 発表可能(世界初？)

(特3) 余震＝概ね予測通りに地震が発生！

(結果) 地震は、電磁観測網で予知すれば、

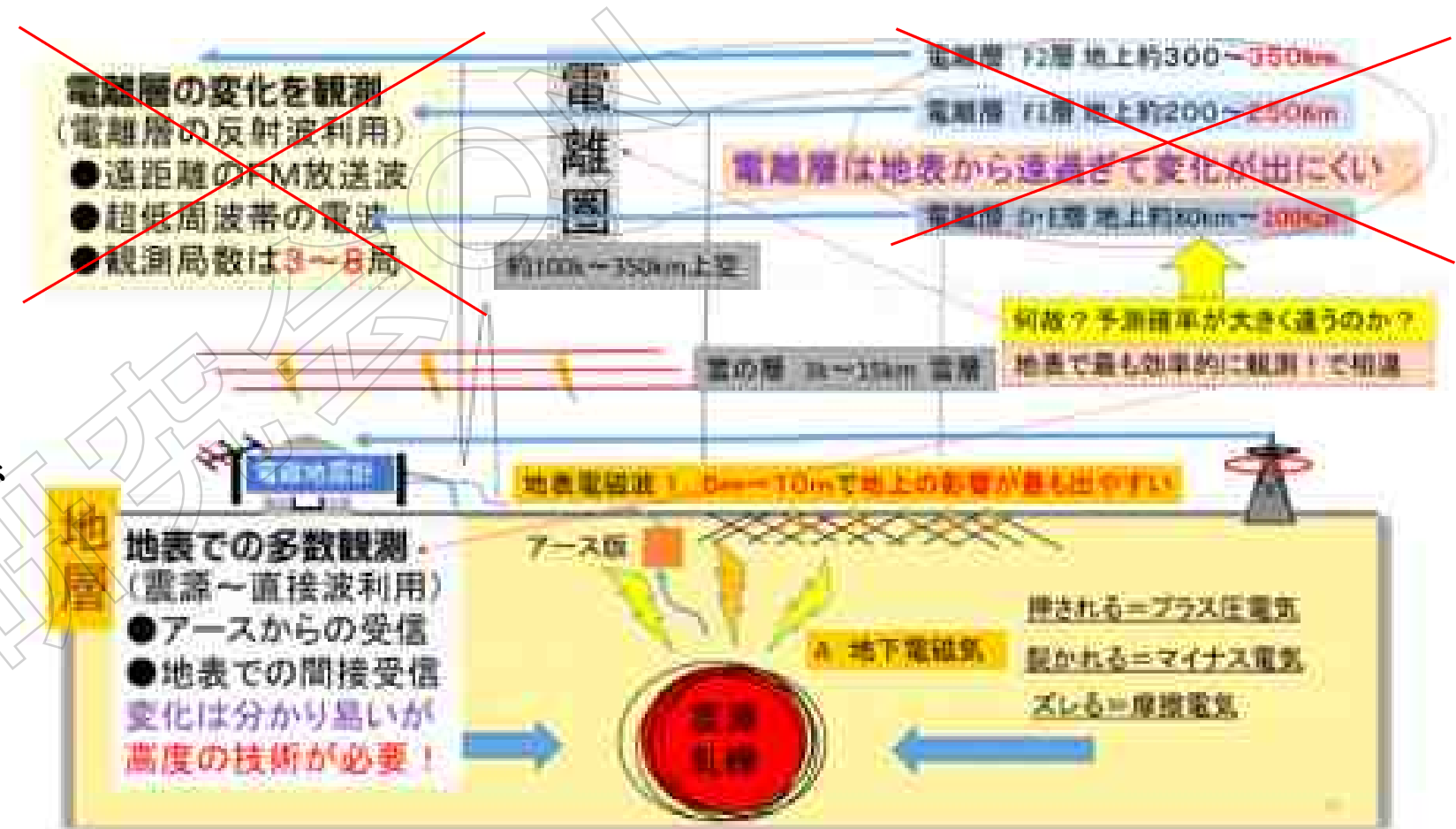
「安全に暮らせます！」

# ○地震起因と電磁気観測

## 理論的解説(仮定と予想) (下図は理想的電磁観測の方式)

地球の外周は、堅い岩盤等で作られた「地殻」で、周囲からの諸圧力で固まっています。

- 1 **地殻**の深部は、引力や重力等による圧力と下からマグマ等の突き上げ等で**超高压**です。
- 2 地球は自公転等による①**海洋潮汐**(数m)や、②月や太陽等の引力で、赤道付近は**地球潮汐**(月は土約 40cm、太陽は土約 17cm)の撓みで毎日揉まれ、目に見えない変形があります。
- ③地殻は**プレートの移動**(年間数 Cm)等で、岩盤に圧力等が掛かり歪みが多重です。



## 地震発生の原因?

地殻に掛かる**土**の超強力な**押し合いへし合い**が繰り返され、震源付近では、岩盤や岩石等の耐圧が、限界(臨界)を越えると、**微小破壊**が始まり、拡大すると断層破壊(地震)に発展しています。

従って、**地震予知**は、地殻内で特に圧力が集中した場所での、**微小破壊等一連の動きを電磁観測**すれば地震源の様相が判ります。

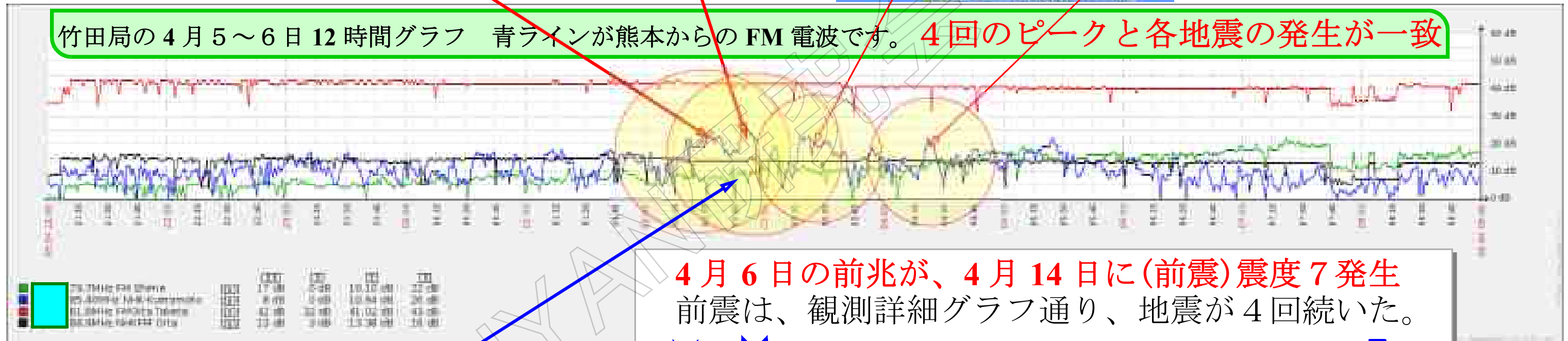


# 熊本地震の実際は群発的地震だった。

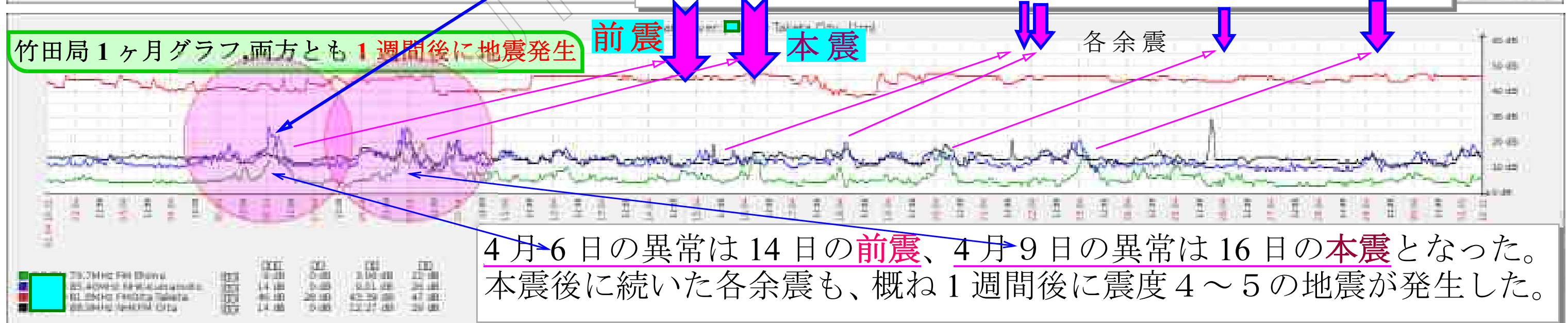
4月14日  
前震



竹田局の4月5～6日12時間グラフ 青ラインが熊本からのFM電波です。4回のピークと各地震の発生が一致



竹田局1ヶ月グラフ、両方とも1週間後に地震発生



◎グラフは、**観測の異常上昇と地震の発生が連動**しています。即ち

# 電磁気が発生！

◎震源では岩石等の軋轢やクラックで「電磁気」が発生しています！

○押されると**圧電気**が発生する。  
(ピエゾ効果)

○引き剥がされると**負の電気**が発生する。

○擦れると**摩擦電気**が発生しています。

震源の上空を通る電波に最も異常が現れる！



熊本県に観測局はありません。しかし、大分県竹田市局が完全に捕捉し、記録も明確でした。

震源の熊本地方と大分県竹田市は、阿蘇山を介して距離約50kmですが、熊本FM放送局の電波は丁度震源の上空を通過していたため、きれいに前兆異常を捕捉・記録したものです。

他の観測局も送信所と震源と受信地点が観測エリア外で、明確な記録はありませんでした。

地球規模では、マグマ流で電磁気が発生し、**SN 等の地球磁場**を形成しています。

結論＝「**物が動けば電磁気が発生する！**」というアインシュタインの理論を元に、帰納的に考察し、多くの電磁気実験をした結果

予知＝「**電磁気観測で地殻内の動きを察知し地震を予知**」**可能です。**

# 電磁誘導作用で地上へ！

## 震源で発生した電磁気は、電磁誘導作用で周囲へと広がり、地表にも伝わります。

- 直流電気は、岩石等の絶縁体があれば、導通困難となって伝導できません。しかし、磁気や静電気は、岩石等の絶縁体があっても、関係無く伝わる事ができます。
- 同様に、電磁気には電磁誘導作用があります。例え中間に絶縁体があっても、コンデンサと同じ働きをして伝わる事ができるのです。(2011年地震学会にて発表済みです。)
- ラジオノイズ等の電磁波も交流なので「電磁誘導作用」で、容易に伝わるのです。

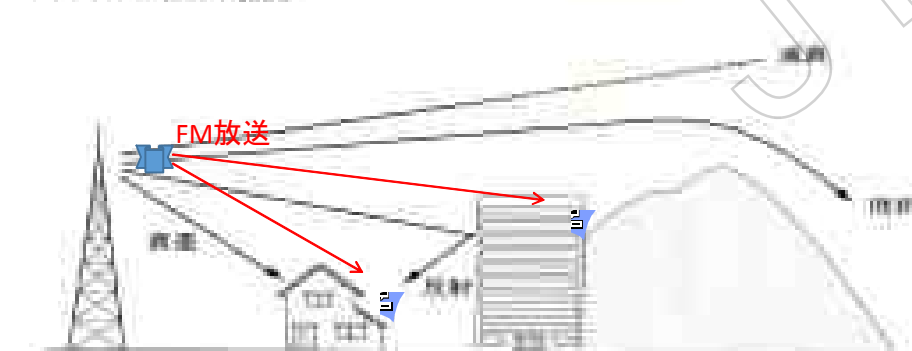
### 資料

電磁波の観測は各種ありますが、当観測網では地表を伝わるFM放送電波等やアースから直接受信して、**揺らぎ現象等を観測**しています。

・ FM波の観測では、直接波を受信するため数m～数十m高の見通しアンテナで受信し、電波Dataを収集しています。なお、直接波観測は、電界強度の「主」向方向の観測が

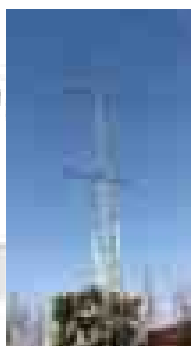
・ 大事で予測には貴重なデータとなります。

図2-4 電磁気現象



遠くなると、100km程度のフレネルゾーン迄の地表波を観測していますが、電離層の変化を利用した観測は、地上80km～300kmの上空になり、観測範囲が広がって3要素が絞りにくいため、当観測エリアは横50kmを基準としています。

FM受信用  
ダイバシティ  
アンテナの例



その証拠や根拠は？

- 1 地震前にスパーク (放電＝電気や静電気等) や、ラジオノイズ等がたくさん観測されている。
- 2 電磁誘導作用は、学論的に十分証明されている現象である。

結果 深い地下からでも、電磁気が発生すれば、地表にも直ちに届いています。

この電磁気を見逃さず、地殻深部の観測手段として、地表で電磁観測を行えば、地下深くにある震源そのものの動きを電磁的に窺い知ることができます。



16日の本震も連続的地震だった。

4月16日

本震

本震 No 1  
震度 6 強  
Mg 7.1  
深さ 10 Km

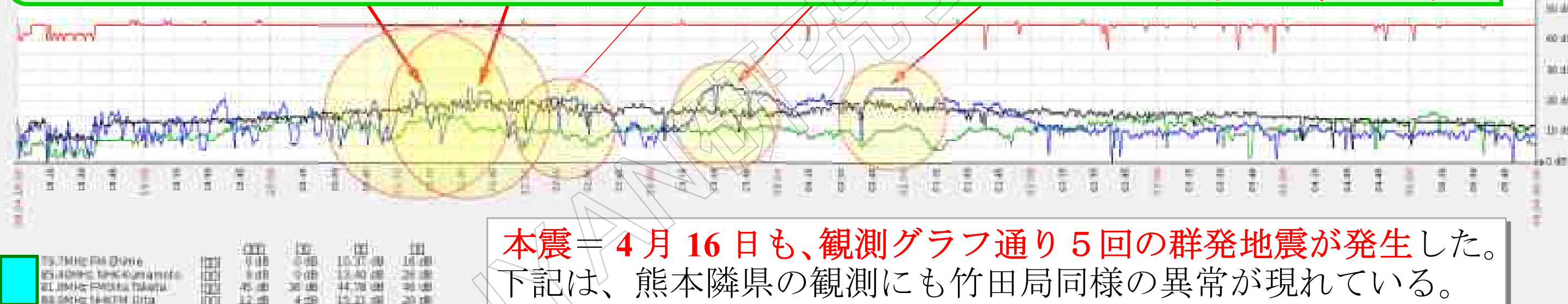
本震 No 2  
震度 6 強  
Mg 7.1  
深さ 10 Km

本震 No 3  
震度 5 弱  
Mg 5.3

前震 No 4  
震度 6 弱  
Mg 6.0

前震 No 5  
震度 6 弱  
Mg 6.0

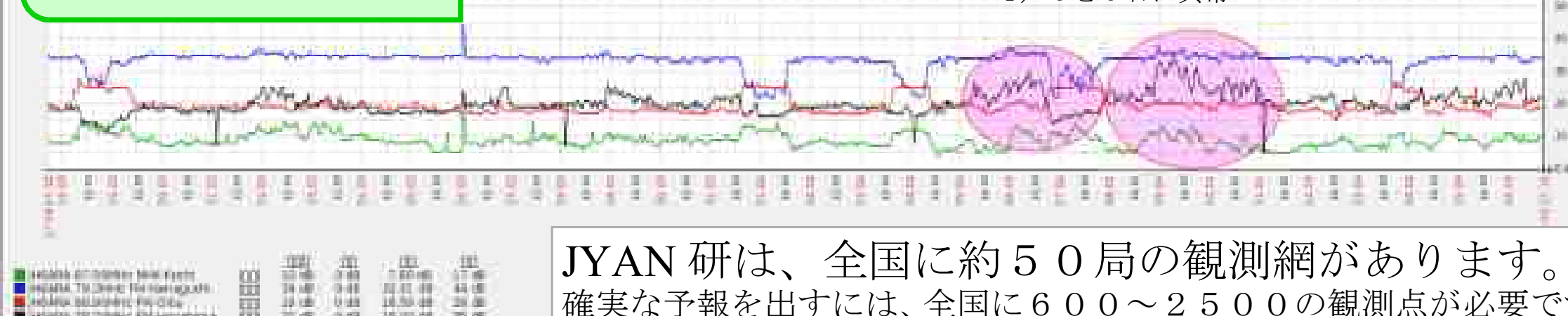
竹田局 4月8～9日 12時間グラフ 青色線が FM 熊本の電波の強さです。5回のピークと地震発生が完全一致！



本震＝4月16日も、観測グラフ通り5回の群発地震が発生した。  
下記は、熊本隣県の観測にも竹田局同様の異常が現れている。

熊本地震は、前震より本震で死者が出たが、大地震が、2回続く事が判ったのは、当該JYAN研のみで、前震4回と本震5回の連続迄読めた！＝世界初！

国東局 1ヶ月グラフ 黒他



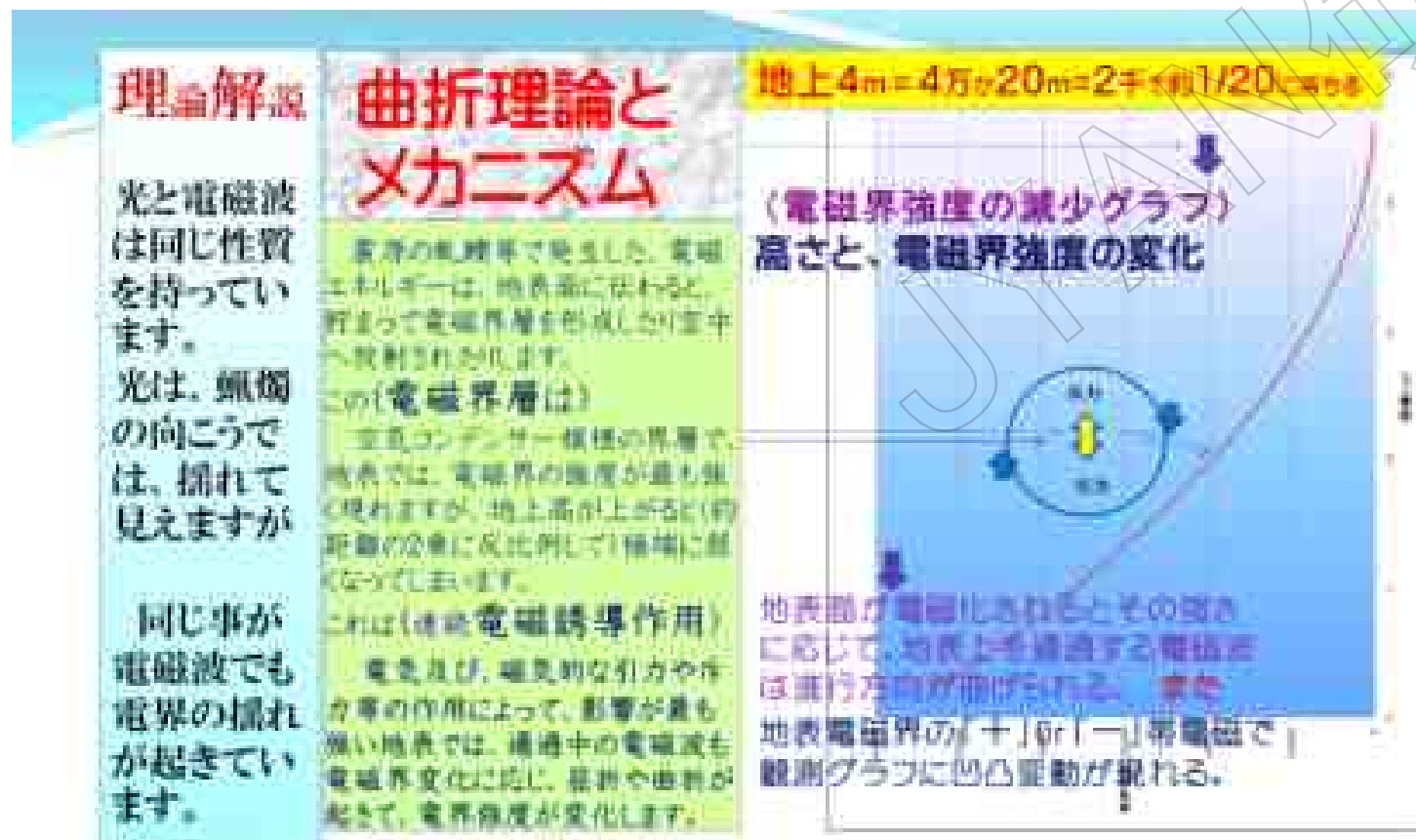
JYAN 研は、全国に約50局の観測網があります。  
確実な予報を出すには、全国に600～2500の観測点が必要です。

なぜ＜震源の電磁変化が、電磁波の観測グラフに現れる？＞

# 電磁波の屈折と曲折現象

まず、**屈折現象**は「光の屈折と同じで、電波の屈折現象です。」

- 地下の震源付近から伝わった電磁気は、地上に届いて貯まります。
- 地上で、一時的に貯まった電磁気は、時間経過と共に周囲へと拡散し、次第に減っていきます。
- しかし、一旦地表に電磁気が伝わると、地表で貯まりその電磁気が、上空へと電磁界層を形成します。この電磁界層は、地表から距離の二乗分の1で電磁力が減少する傾斜型の電磁界層となります。

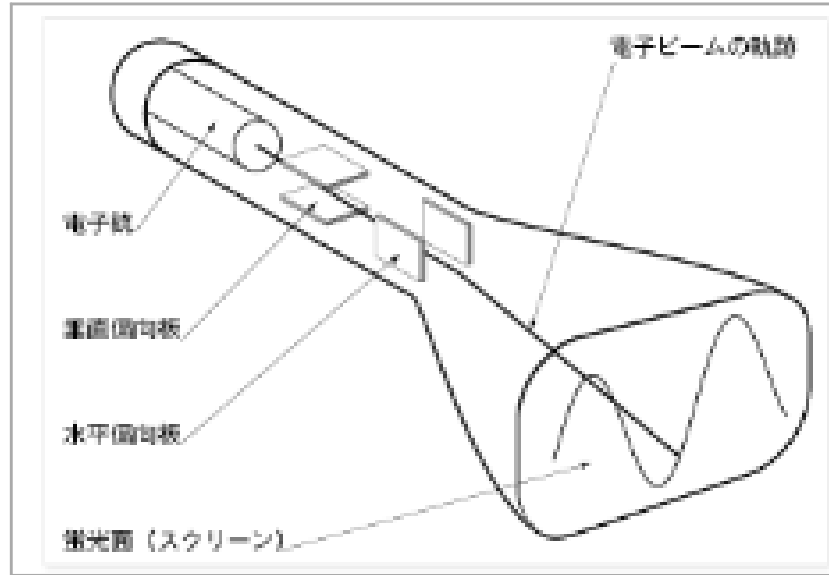


(理論)左図にある傾斜型の電磁界層の中を電磁波が横切ると、電磁界の強い方向に「**屈折作用**」が起きます。これは即ち、地下で起きた電磁気が、地表で電波の伝搬ルートを変化させ、受信局の電波の電界強度を変化させる事になります。(参考 電波ミラージュは、2011年地震学会で発表しました。)



# 電波の曲折作用＝電磁的「引力や斥力」

ブラウン管と同様、電磁波にも電磁気による偏向曲折が起こります。



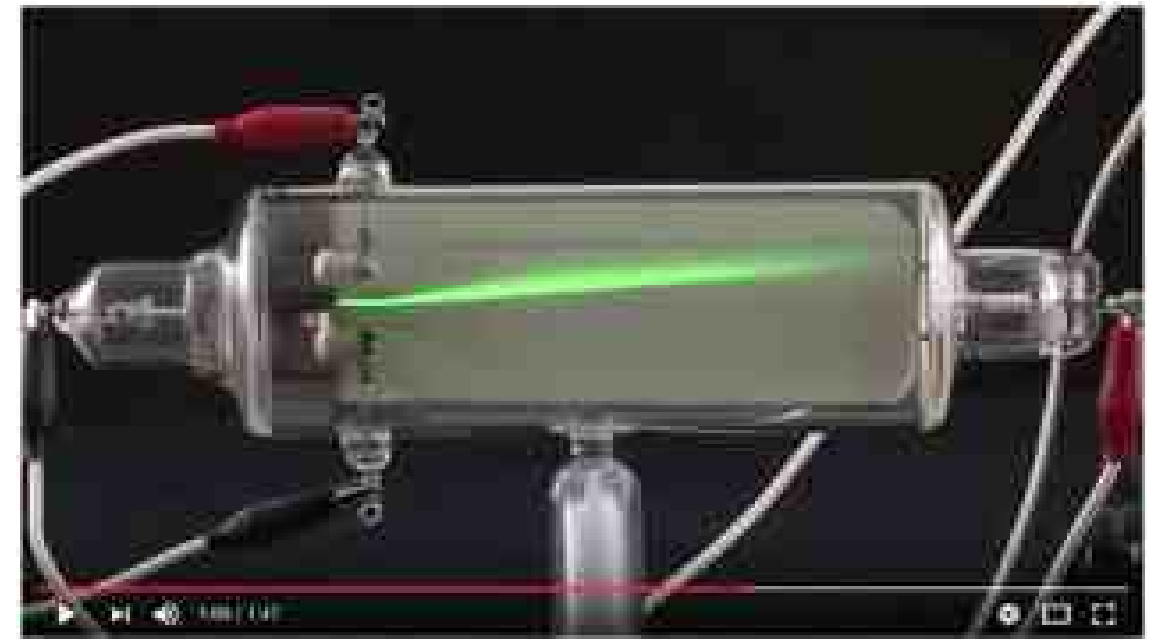
上図は、CQ 出版 オシロスコープ入門

○電磁波の伝搬ルートに、±に変化する電磁界があれば、電磁波にも引力や斥力が働いて伝搬ルートに偏向曲折が「発生」と考えています。即ち、ブラウン管の偏向を、例えると

○ FM 電波(＝電子ビーム)が、地表で変化する電磁界(＝垂直又は水平等の偏光板)を、通過すると、電磁界の強弱変化に応じて電磁波の進行方向が曲折します。これは、すなわち

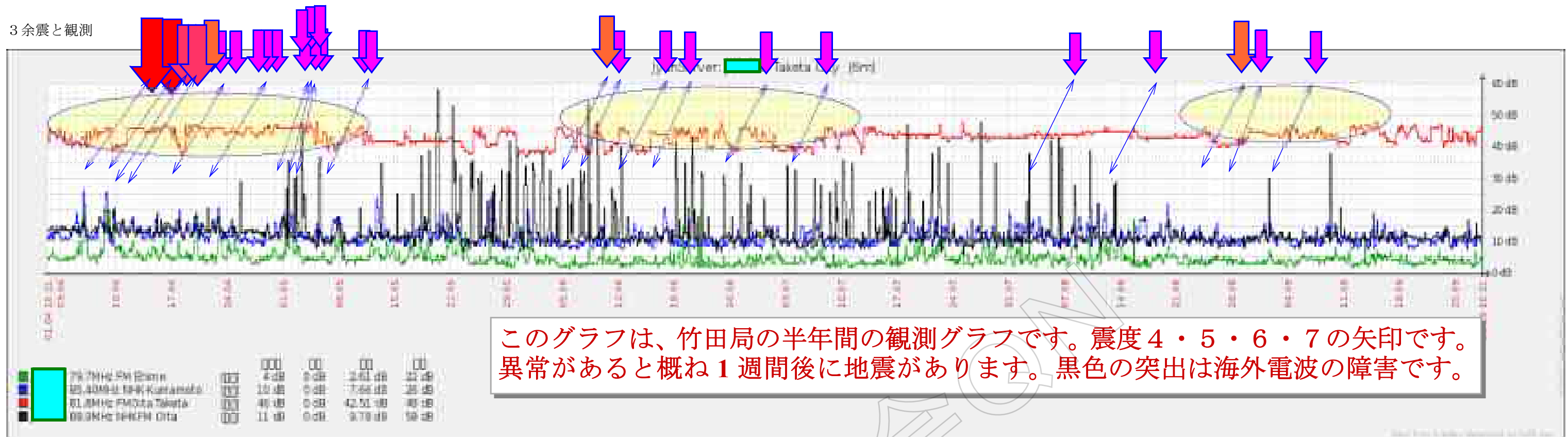
下写真は B10-7222 クルックス管 CT-TR(偏向極板入り)を使った点灯実験から

(2) 進行中の電磁波自体に、偏光板と同様の「電磁気的な引力や斥力等が働いて、電磁波の進行ルートが曲折したもの」であり、結果として FM 電波の受信電界強度が変化したものと考えています。

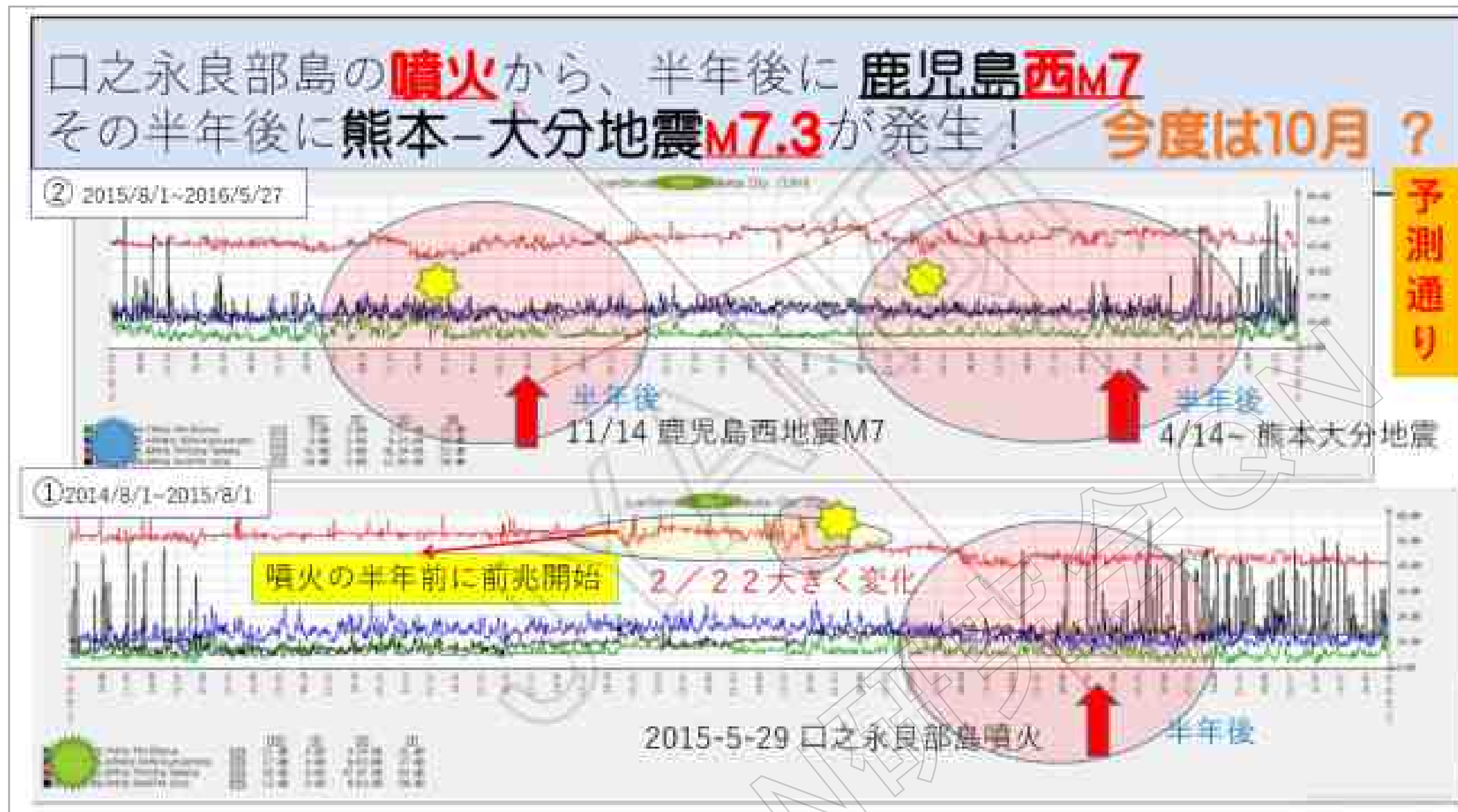


**結果** この観測は、地上を通過する電磁波の強さを観測していますが、原理的には、地下震源の軋轢変化によって、電磁気が発生し、地上迄伝わると軋轢変化通りの電磁界が形成され、通過する電磁波に<屈折や曲折現象>を起こして、観測グラフに現れたものです。

ただし、地表での観測は、FM 直接波等上中下の観測を併せると地殻変化の全体像が良く判ります。また、全国的な観測網の敷設で正しい地震予報が配信できます。 9



- ◎ 上の図は、一年間の観測グラフです。黒色（FM 大分）は E-supu による混信です。特殊な方法で弁別する事ができます。また、地震の予想で、正逆等の断層判定も電磁観測が有効です。
- ◎ 1 左の図は、沖永良部島の噴火から半年後に鹿児島西で M7 の地震が発生し、半年後に熊本で M7.1 の地震が発生しました。
- 2 熊本地震に触発されて大分でも地震が連続で発生しました。今回は、その方向性が明白でしたし、5月初めに延長上の伊予沖で強いノイズが観測されました。
- 3 伊予沖のノイズは7月頃から減少傾向になったので、延長線上で、半年後の地震を予想（10月に鳥取で地震）していました。
- 4 噴火と周囲での地震発生は関係があります。（経験則）
- 5 地殻歪みの伝導速度は、100 Km/半年、200 Km/半年、300Km/半年等となるようですが、上下は数 Km/Day でしょう。



これは、地震と噴火の関係を表した電磁観測グラフと噴火や地震の発生記録です。

記録は竹田での記録ですが、このように良く現れています。観測網になって、近隣局との照合ができると3要素が判るようになってくるでしょう。

地球の内部は常に流動的ですが、物が動けば電磁気が発生していると言う証拠となるでしょう。

- 1 口永良部島での噴火から半年 (噴火の後は地震が起きる)
- 2 鹿児島西沖 150 Km でマグニチュード7の大地震
- 3 その半年後、同じ方向の熊本で地震発生
- 4 熊本地震に触発され湯布院・別府で地震発生
- 5 伊予灘でノイズが多く出た。(6月頃治まりかけた)
- 6 別府から半年後、その方向で鳥取地震発生
- 7 やはり、噴火と地震は関係ありだ (経験則となった)



# 未来の地震観測と地震予報

耐震化が進んでも、地震予知は必要ですか？

確かに、震度4～5クラスまでは問題ありません。しかし、突然の大地震、そして前触れの無い大噴火、これらの自然の大災害は、実は、**防ぎようがありません**。不幸にも災害に遭遇してしまえば、殆ど生き延びる術はありません。**大地震と大噴火等から助かる方法はただ一つ。それは、「予報」だけなのです。**

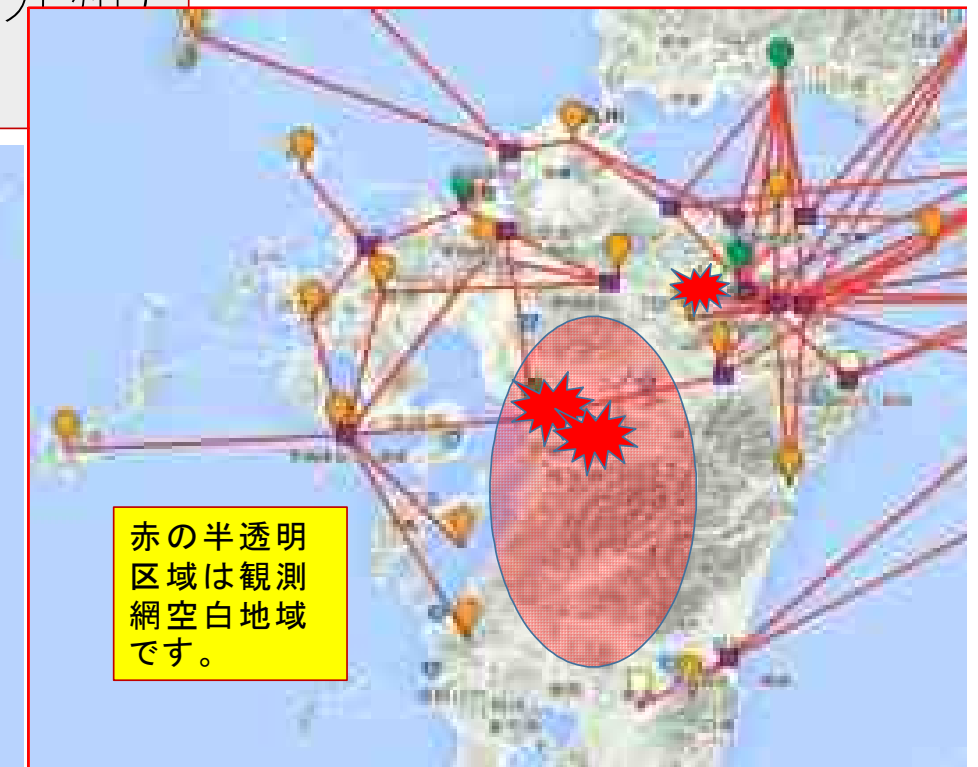
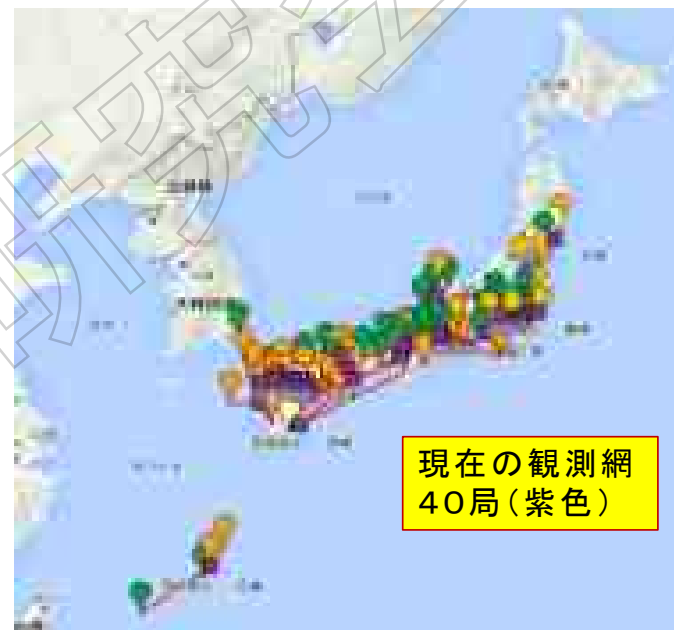
この難問を解決するには、私が提唱している電磁観測網の全国敷設しかありません。国民の安全を図るのは国の仕事です。従って、いくら費用が嵩むからと、言っても、避けては通れません。

これまでは、地震警報(超高感度地震計利用)地殻変動(GPS受信装置の地表観測)海洋観測(太平洋に地震観測網設置)を行いましたが、**全て地震予知が困難**でした。

私達は、確かな観測証拠で、電磁観測を提唱していますが、J学会やK庁は真摯に取り組まれてみては如何でしょうか？技術協力は惜しみません。今のままでは、いつまで経っても予知困難で死亡者が増え、国民的な不満で**とんだ大地震**が起きます。

私達は、地震を予知する方法を考案し、実験し、証明迄しました。後は観測システムの構築だけです。**大勢の命が助かるでしょう。**また、**県地域(又は法人や個別的)の観測システム構築**も安い費用で可能です。**技術指導や援助等**できます。

現観測局配置図(九州)  
「熊本県のみ無し」

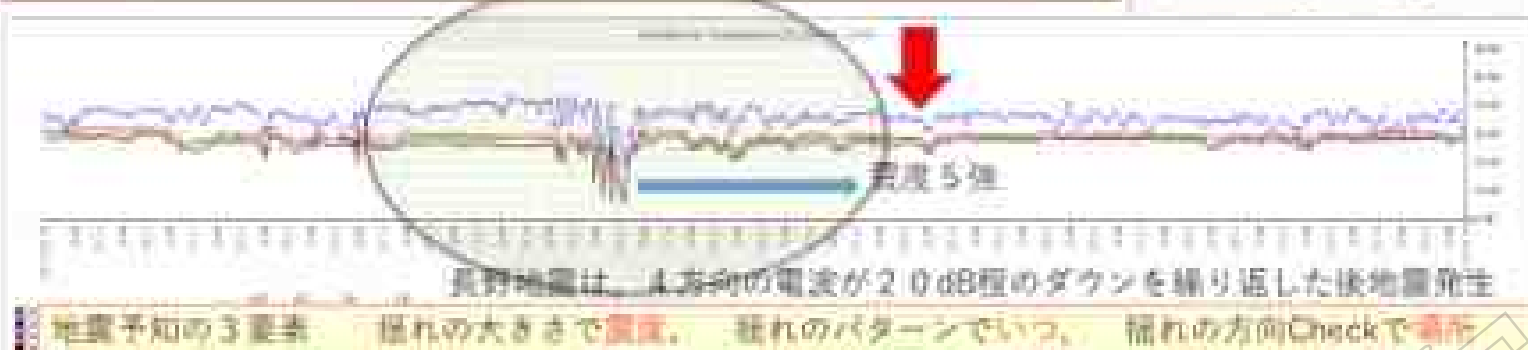


## 地震の観測例 (どちらも1週間後に地震発生他多数有) 淡路島地震と長野地震



淡路島は  
レベルアップ 当観測は  
(逆断層型) = これって  
(2013年4月) 凄い

長野地震は  
レベルダウン  
(正断層型) = これも凄い  
(2014年11月)



最後に、なぜ？ 地震予知はできないの？  
と聞かれます。実は、地震学会自体が電磁観測に無関心で、電磁的な研究には予算の配分が殆ど無く、私達にもありません。

しかし、私達は、地震と不思議な電磁現象の探求から、20年に亘って、自費研究を続けています。研究と観測はあらゆる電波、方式、アンテナ等を使って研究をしており、新発見の連続です。Amateurを侮ってはいけません。電磁現象は私達の得意分野ですし、常に最先端の技術を取り入れて追求しており、先端技術を利用した開発ができます。

左上図は、淡路島と長野地震の観測記録です。両方とも大きい揺れの後1週間で地

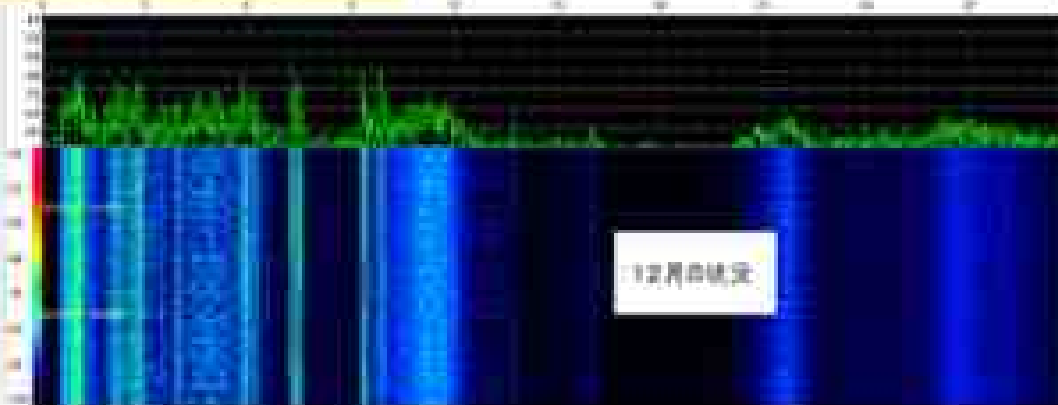
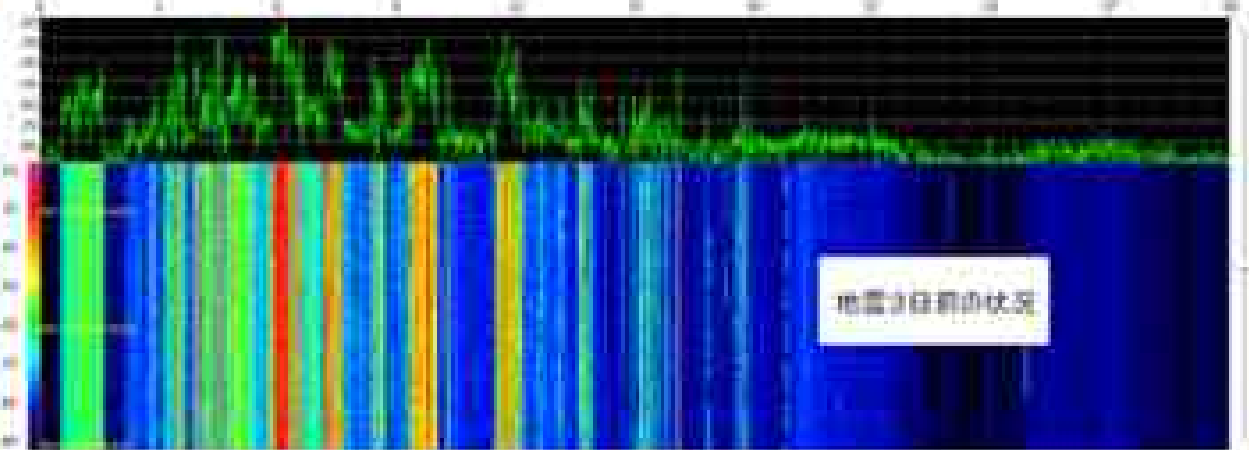
震が起きています。こんな例は数多くありますが、揺れも、縦、横、上下などの揺れ方に断層的な特徴があり、電磁的な前兆現象には正逆等の断層や、横ずれ断層等の独特の揺れが現れてきます。(地震断層の予測技術は世界初！でしょう。)

右の観測は、東日本の大地震での観測記録で、上が地震3日前、下はその3ヶ月前です。一目で状況が違うことが判るでしょう。

地震予知の3原則は以外と簡単で、現在は、発生日と発生時間迄の予測技術を開発し検証実験中です。地震研究は日進月歩です。 國廣秀光。

## 東日本 大震災 (短波帯)

通常のと看



地震前は電波  
の強さを現す  
色の様子が  
全然違うのです。



◎地震研究と JYAN 研究会の経歴＝ 2017 年も JGU で 2 回の発表です。

- ・2007年 5月 災害情報学会、日本地震学会などに入会、その後日本地球惑星科学連合学会入会
  - ・2009年 5月 ハムの月刊誌「CQ」で4月・5月に研究会員募集、15名でJYAN研究会発足
  - ・2009年10月 日本地震学会(京都大学)で地震電磁波などの監視方式などを発表
  - ・2011年10月 日本地震学会(静岡)で電磁気などの異常理論を発表
  - ・2012年 8月 東京ビッグサイトのハムフェアに出展(このときから、毎年展示～連続5回)
  - ・2013年 7月7日 JYAN大分ネット第2回総会で研修会を実施
  - ・2013年10月2日 産経新聞夕刊「1面トップ」にJYAN研究会紹介
  - ・2014年 3月14日 2時7分頃伊予灘で地震発生 全面記録できる
  - ・2014年12月25/26日 日本地震予知学会(電通大)で2項発表
  - ・2015年 5月25日～26日 JGUの学会大会(幕張)2項の発表
  - ・2016年4月14&16日の熊本地震でM7クラスが2回来る事を観測と予測できたのはJYAN研のみ！
  - ・2016年12月5日 日本地震予知学会のニューズレター第3号に2Pで当JYAN研が紹介されました。
  - ・2017年3月5日 西日本ハムフェアで熊本地震での地震観測状況などを講演し好評でした。
- 学会等の発表及び講演 日本地震学会4回、JpGU3回&講演22回(2017-5JpGU発表予定)
- 記事＝CQ5回新聞4回 観測網は全国で50局が(200波)を観測中！
- 地震予知アマチュアネット(地震前兆ノイズ研究会・会員ML等350名超・大分県国東市)
- JYAN研究会&地震予測観測網 会長 JH6ARA 國 廣 秀 光

○ 地震の未来予想図  
天気予報と同じようになります。  
来週の天気予報＝来襲の地震予報  
晴れ、雨、曇り＝いつ、どこ、震度

地震の有る率	基準
0%	無し
10～30%	少し
40～60%	半々
70～90%	ほぼ
100%	有る

地震予報の例

	いつ	どこ	震度	有る率
例1 通常	来週土曜日を中心に、	大分県北部地方で、	震度5クラスの地震が、	50%の予想です。
例2 直近	明後日頃(日)	杵築・国東地方で	震度5弱の地震が	80%の予想です。
例3 直前	明日未明(時間)	国東沖で	震度5の地震が	有るでしょう
例4 短期	来月終わり頃(月)	九州地方で	震度5クラスの地震が	50%の予想です。
例5 長期	半年後くらいに(年)	九州・四国地方で	震度6クラスの地震が	20%の予想です。
例6 世界	数ヶ月後くらいに	中国の西部で	震度7クラスの地震が	50%の予想です。

震度と警報の例

震度 3～4 注意報、 5～6 弱警報、 6 強～ 7 特別警報



# JYAN研 (研究会)

大分県地震観測網 (10局)

全国地震予測観測網 (40局)

東北 石巻・福島・関東 鹿島・印西・船橋・埼玉・練馬・西多摩・横浜・(栄) 東海 富士宮・磐田・高橋・名古屋 近畿 宝塚・貝塚・川西・旭区 北陸 金沢 四国 新居浜・高知・室戸 中国 三原・呉 九州 宮崎・宗像・太宰府・唐津・長崎・延岡・鹿児島 大分県 国東・豊後高田・中津・日田・竹田・佐伯・大分・大分東・別府・移動 沖縄 名護

地震予知研究所 & JYAN 研究会 (≒400人)

代表 (JH6ARA) 國廣秀光

8 7 3 - 0 5 0 3

ホームページ (4)

Mail

大分県国東市国東町 (0978-72-2643)

JYAN 研究会 HP

<http://jyan.biz/>

[jh6ara@jarl.com](mailto:jh6ara@jarl.com)

地震情報サイト

<http://www.oct-net.ne.jp/jh6ara/>

[jh6ara@orange.ocn.ne.jp](mailto:jh6ara@orange.ocn.ne.jp)